
RYAN GOSLING
a NICOLAS WINDING REFN film
Drive
[TBD FOREIGN DISTRIBUTOR] presents in association with BOLD FILMS and ODDLOT ENTERTAINMENT a MARC PLATT/MOTEL MOVIES production a NICOLAS WINDING REFN film
RYAN GOSLING "DRIVE" CAREY MULLIGAN BRYAN CRANSTON CHRISTINA HENDRICKS RON PERLMAN with OSCAR ISAAC and ALBERT BROOKS
casting by MINDY MARIN, C.S.A. costume designer ERIN BENACH music by CLIFF MARTINEZ production designer BETH MICKLE edited by MAT NEWMAN director of photography NEWTON THOMAS SIGEL, A.S.C.
executive producers DAVID LANCASTER GARY MICHAEL WALTERS BILL LISCHAK LINDA McDONOUGH JEFFREY STOTT PETER SCHLESSEL
produced by MARC PLATT ADAM SIEGEL GIGI PRITZKER MICHEL LITVAK JOHN PALERMO based on the book by JAMES SALLIS screenplay by HOSSEIN AMINI directed by NICOLAS WINDING REFN
Motion Picture Copyright © 2011 Drive Film Holdings, LLC. All rights reserved.

カンヌで最もクールな作品
THE SUNDAY TIMES

これぞ最高レベルの完璧な映画！ 2011年のベストフィルムだ
COLLIDER

「ドライヴ」は制限速度以上に観客を満足させてくれる
MOVIELINE

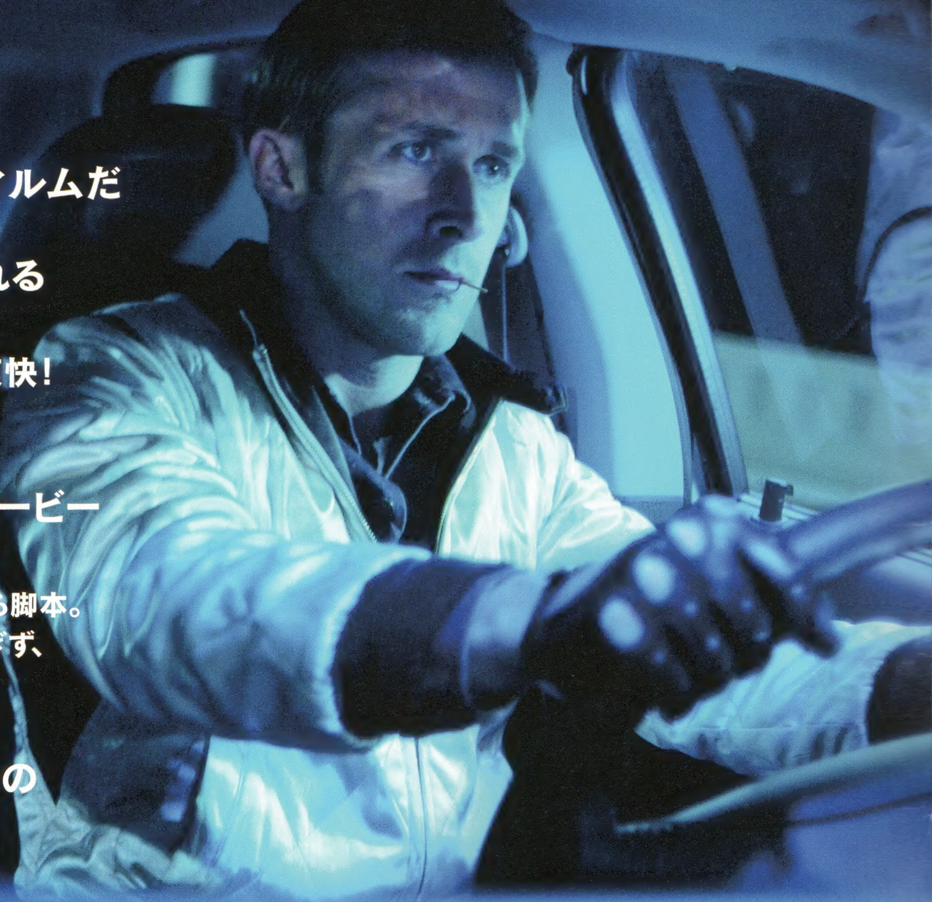
言葉で表現出来ないほどに華麗で、エキサイティングで、爽快！
すぐにもう1度観たくなる
First Showing

歓楽的、かつスリリングに描かれた新鮮なクライムムービー
VARIETY.COM

心を掴む演技、衝撃的なライティング、完璧な音楽、そして緊張感溢れる脚本。
これらはニコラス・ウィンディング・レフンの才能の氷山の一角にすぎず、
その優れた才気こそが最新作「ドライヴ」には詰まっている
Cinema Blend

「ドライヴ」は、ニコラス・ウィンディング・レフンからの
型破りなラブレターだ
IndieWIRE

超スタイリッシュで、時に暴力的な「ドライヴ」は、
70、80年代米クライム映画への崇高なる誓約だ
SCREEN INTERNATIONAL



Review

余分な要素を一切省いた、他とは一線を画す魅力の集合体。
それが「ドライヴ」だ
Hollywood Reporter


疾走する 純愛——



Introduction

カンヌ映画祭、そして世界が絶賛！制限速度オーバーの最高にクールな超絶クライム・サスペンス

昼はハリウッドのスタントマン、夜は強盗の逃走を請け負う運転手の“ドライバー”。その天才的なドライビングテクニックゆえに、危険な裏社会の抗争に巻き込まれていく孤独な男を描いた『ドライヴ』が、ついに日本上陸！
カンヌ国際映画祭で監督賞を受賞し、ローリングストーン、ウォールストリートジャーナル、ムービーライン、ワシントンポスト、タイムアウトNYをはじめとする数々のメディアで最高レベルの満足度と評価を叩きだした本作。
この映画史に残る傑作を生み出したのは、今や“ラース・フォン・トリアー以来、最大の成功を収めた映画監督”の異名をもつデンマーク出身の鬼才ニコラス・ウィンディング・レフン。
ジェイムズ・サリスの同名人気クライム小説を原作に、徹底的に贅肉を削ぎ落した演出で、愛する人を守るため裏社会を相手に一人闘いに身を投じるドライバーの孤独と悲哀を、時に衝撃的なまでに情感豊かに描き出した。
それまで抑えつけられていた暴力性が一挙に噴出する緊迫のクライマックス。そして、静謐さとバイオレンス、計算しつくされた映像美と本能に訴えかけるサウンドが美しく融合し、ここに激しく心揺さぶる新たな愛の物語が誕生した。

世界一寡黙な主人公、ライアン・ゴズリングの最高傑作！スクリーンの闇を切り裂く衝撃を体感せよ。

映画史上類を見ない寡黙な主人公“ドライバー”を演じるのは、その目覚ましい活躍ぶりで、今ハリウッドで最も注目される演技派俳優ライアン・ゴズリング。日本では、『きみに読む物語』『ラースと、その彼女』『ブルーバレンタイン』などのラブストーリーでお馴染みの彼が、今までのイメージとは打って変わり、繊細ながらも内なる暴力性を秘めた難役に挑戦し新境地を拓いている。
そして、ドライバーが愛する人妻アイリーン役には、『17歳の肖像』でアカデミー賞主演女優賞ノミネート後、『わたしを離さないで』ほか、今後もディカプリオと共演の“THE GREAT GATSBY”などの話題作への出演が続く若手注目株のキャリー・マリガン。
また、自身初となるヒール役が絶賛されている『ブロードキャスト・ニュース』のアルバート・ブルックス、「ブレイキング・バッド」でエミー賞初の3年連続・主演男優賞受賞歴を持つブライアン・クランストン、ギレルモ・デル・トロ監督作の常連俳優ロン・パールマンなど、一癖も二癖もある個性的で魅力的な悪役たちが脇を固め、単なる犯罪劇以上の深味を作品に与えている。
役者陣の見事な演技、フォードマスタングGT、クライスラー300、シボレーノバによる追跡劇、犯罪劇にサスペンス、アクション、バイオレンス、ノワール、ラブストーリーといった多彩なジャンルが見事に絡み合う本作。冒頭からクライマックスまで一瞬たりとも目が離せない衝撃の展開が、必ずや観る者を迎え撃つことだろう。

Story

天才的なドライビングテクニックを持つ寡黙な"ドライバー"（ライアン・ゴズリング）は、昼は映画のカースタントマン、夜は強盗の逃走を請け負う運転手。ひとたび依頼を受ければ、迷路のように入り組んだLAの街をパトカー相手に機械のような正確さで走り回り、淡々と任務を遂行するプロの逃がし屋だ。

ある晩、仕事を終えたドライバーは、同じアパートに暮らすアイリーン（キャリー・マリガン）と偶然エレベーターで乗り合わせ、一目で恋に落ちる。そして、車の故障で困っている彼女と息子のベニシオを助けたことで、次第に親しくなっていく。

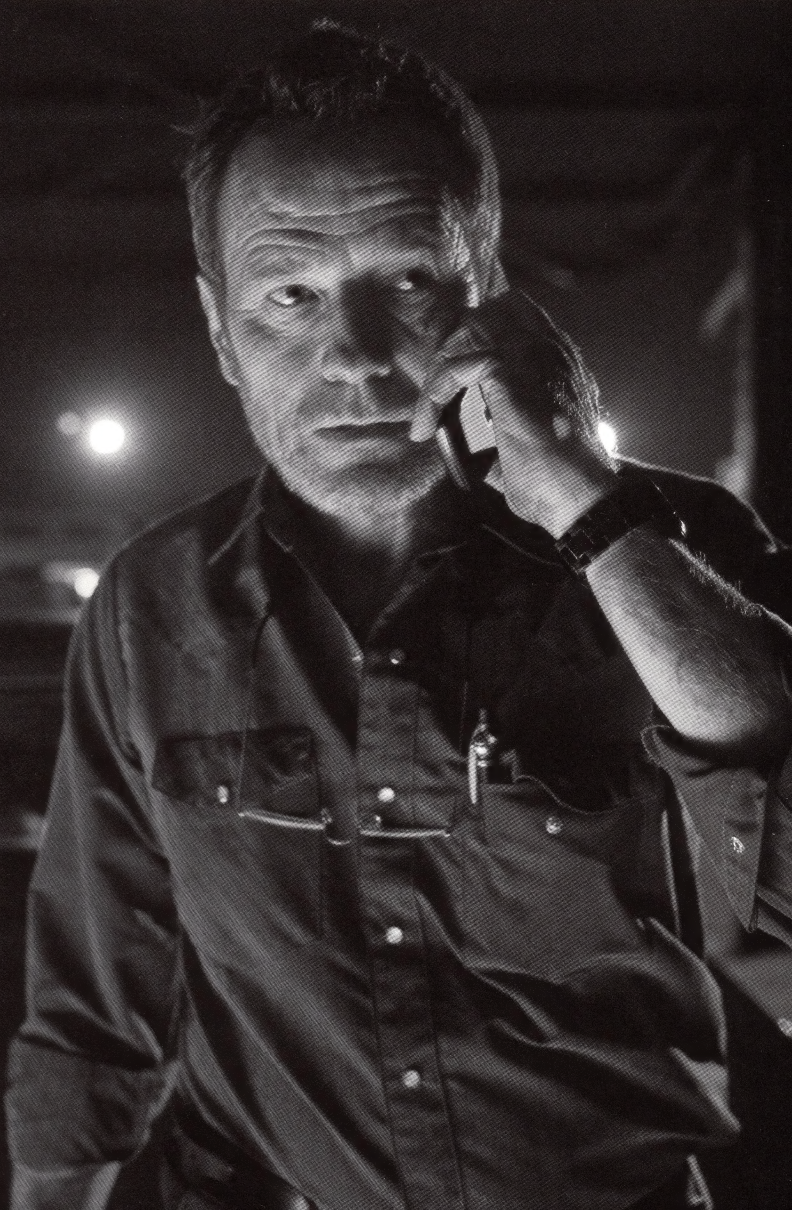
車の修理工場を営むシャノン（ブライアン・クランストン）は、そんなドライバーのエージェントであり、昼夜両方の仕事の面倒をみていた。シャノンには、ドライバーと組んでサーキットで優勝するという夢があった。そのためには、ドライバーの腕に相応しいレーシングカーが必要だ。そこでシャノンは、旧知の仲でもある元映画プロデューサーで今はマフィアの幹部となったバーニー・ローズ（アルバート・ブルックス）に資金援助を申し出る。実際にサーキットでドライバーの走りを目にしたバーニーは出資を承諾、仲間のニーノ（ロン・パールマン）もこの"ビジネス"に一枚咬むことに。

そんなある日、アイリーンの夫スタンダード（オスカー・アイザック）が、服役を終え戻ってきた。本心から更生を誓う夫を見たアイリーンは、ドライバーに心を残しながらも家族を守る選択をする。ドライバーも一旦は身を引き家族から距離を置くが、ある晩、ガレージで血塗れで倒れているスタンダードと近くで怯える小さなベニシオを発見してしまう。服役中の用心棒代として多額の借金を負ったスタンダードは、とある強盗依頼を断れば妻子の命はないとマフィアから脅されていたのだ。絶体絶命のスタンダードは、ドライバーに助けを求める。

後日、質屋襲撃の計画がマフィアの一味クックの口から告げられる。その場には、スタンダード、クックが連れてきたストリッパーのブランチ（クリスティナ・ヘンドリックス）、逃走を手助けする役目のドライバーがいた。計画通り、スタンダードとブランチが質屋に入り現金を入手するが、外で待機していたドライバーの眼前でスタンダードが射殺されてしまう。そして、突如姿を現した謎の車が、盗んだ金を奪うべくドライバーに攻撃を仕掛けてくる。予想外の大金を抱えたまま、何とかモーテルに逃げ込んだドライバーとブランチ。しかしTVから流れてきたのは、犯人とされるスタンダードの死と、質屋襲撃による実害は無し、とのニュースだった。
クックに嵌められたことを悟ったドライバーは、ブランチから真実を聞き出そうとするが、追手に頭を撃ち抜かれ口を塞がれてしまう。命からがら追手を返り討ちにし、シャノンの工場に逃げ込んだドライバー。一体何が起こったのか？

クックの居場所を突き止めたドライバーは、彼の雇い主ニーノに手元の100万ドルをネタに交渉を試みる。
そしてアパートに戻り、夫を亡くし傷心中のアイリーンに今までの経緯を説明、一緒に別の土地で暮らそうと告げる。降下するエレベーターの中で、初めてキスを交わす2人。だがその瞬間、ニーノが放った殺し屋の存在に気付いたドライバーは相手を滅多打ちにし、彼の突然の凶行に慄いたアイリーンはその場に立ち竦んでしまう。

質屋に隠してあった東部マフィアの裏金を横取りしようと企んでいたニーノは、仲間のバーニーと共に、自分が首謀者であることを知るドライバーとシャノンを消し去ろうとしていた。そして、その手はドライバーの愛する人間にも…。
工場でシャノンの無残な死体を発見したドライバーは、その報復、そしてアイリーンとベニシオの身の安全を確保するため、逃走から攻撃へ一気にシフトシェンジをした——





Ryan Gosling | ドライバー

ライアン・ゴズリング

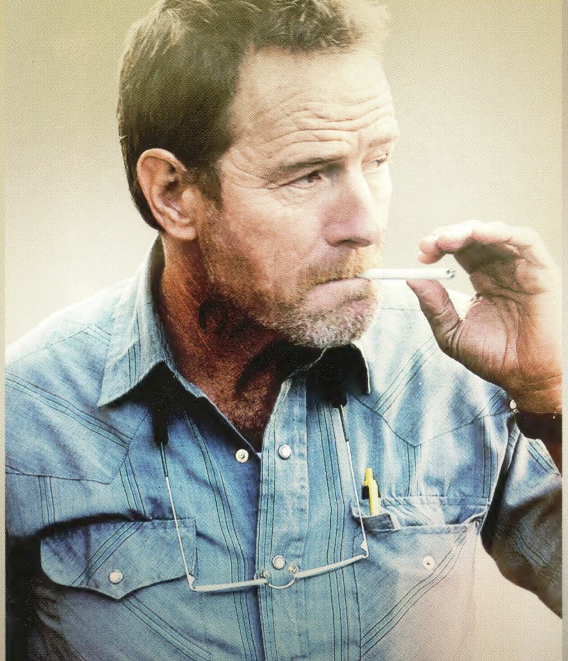
1980年カナダ、オンタリオ州生まれ。
人気キッズ番組「ミッキーマウス・クラブ」などのTVシリーズで子役としてキャリアをスタート。96年に、『フランケンシュタインと僕』(未)で映画デビュー。デンゼル・ワシントン主演の『タイタンズを忘れない』(00)での出演を足がかりに、ハリウッドに活躍の場を広げる。翌年、映画初主演作となった“The Believer”で、インディペンデント・スピリッツ賞主演男優賞にノミネートされるなど、批評家から高い評価を得る。
2004年、世界的に大ヒットした『きみに読む物語』で一気にブレイク。06年、“Half　Nelson”で演じたスラム地区のドラッグ中毒の中学教師役でインディペンデント・スピリッツ賞主演男優賞を受賞、26歳という若さでアカデミー賞主演男優賞、サテライト賞、シカゴ映画批評家協会賞などにもノミネートされた。『ラースと、その彼女』(07)、『ブルーバレンタイン』(10)でもゴールデングローブ賞主演男優賞にノミネートされ、今や人気、実力ともにハリウッドを代表するスターの1人となった。
その他の出演作に、『完全犯罪クラブ』(02)、『16歳の合衆国』(02)、『ステイ』(05)、『ラブ・アゲイン』(11)、『スーパー・チューズデー　～正義を売った日～』(11)など。今後も『ギャングスター・スクワッド(仮題)』、テレンス・マリック監督作“Lawless”、『ブルーバレンタイン』監督の新作、レフン監督との再タッグ“Only God Forgives”など主演作が続々待機中。



Carey Mulligan | アイリーン

キャリー・マリガン

1985年イギリス、ロンドン生まれ。
10代より芝居に魅せられ、2005年、キーラ・ナイトレイ主演の『プライドと偏見』で映画デビュー。「ブリーク・ハウス」(05)、「奥さまは首相～ミセス・プリチャードの挑戦」(06)などのTVシリーズに出演後、『17歳の肖像』(09)のヒロイン役で一気にブレイク。本作では、英国アカデミー賞主演女優賞を受賞ほか、アカデミー賞、ゴールデングローブ賞の主演女優賞にもノミネートされ、一躍注目の若手女優の1人となった。『パブリック・エネミーズ』(09)で本格的にハリウッドへ進出、08年にはブロードウェイデビューも果たしている。
その他の出演作に、『マイ・ブラザー』(09)、『ウォール・ストリート』(10)、『わたしを離さないで』(10)、『SHAME-シェイム-』など。今後もディカプリオと共演の“The　Great　Gatsby”、コーエン兄弟の新作など話題作が待機中。



Bryan Cranston | シャノン

ブライアン・クランストン

1956年カリフォルニア生まれ。
ショービジネスの一家に生まれ、8歳でCMデビュー。大学在学中よりプロの役者を目指し、様々な舞台に出演。その後、TV映画“Love　Without　End”への出演をきっかけに、本格的に役者の道へ。TVシリーズ「マルコム　in the Middle」(00～)ではゴールデングローブ賞、エミー賞にノミネートされ、「ブレイキング・バッド」(08～)ではエミー賞初となる3年連続の主演男優賞受賞を記録。俳優以外にも、脚本、監督もこなし、「マルコム　in the Middle」「ブレイキング・バッド」の何エピソードかでは監督も務めている。
その他の出演作に、『リトル・ミス・サンシャイン』(06)、『コンテイジョン』(11)など。今後もトム・ハンクス、ジュリア・ロバーツと共演の“Larry　Crowne”、ジョージ・ルーカス脚本の“Red Tails”が待機中。



Albert Brooks | バーニー

アルバート・ブルッ

1947年ロサンゼルス生まれ。
ラジオ・コメディアンの父を持
として活躍しながら、TVショー
75年からは「サタデー・ナイ
掛けるようになる。76年、『タ
ビュー。87年の『ブロードキャ
賞助演男優賞にノミネートさ
ル・ストリープ主演の『あなた
シャロン・ストーン主演の『ハ
は、監督・脚本も務めている。
その他の出演作に、『プライ
ワイライトゾーン／超次元の体
(98)、『ドクター・ドリトル』(98
グ・ニモ』(03／声の出演)、
『ザ・シンプソンズ MOVIE』(07

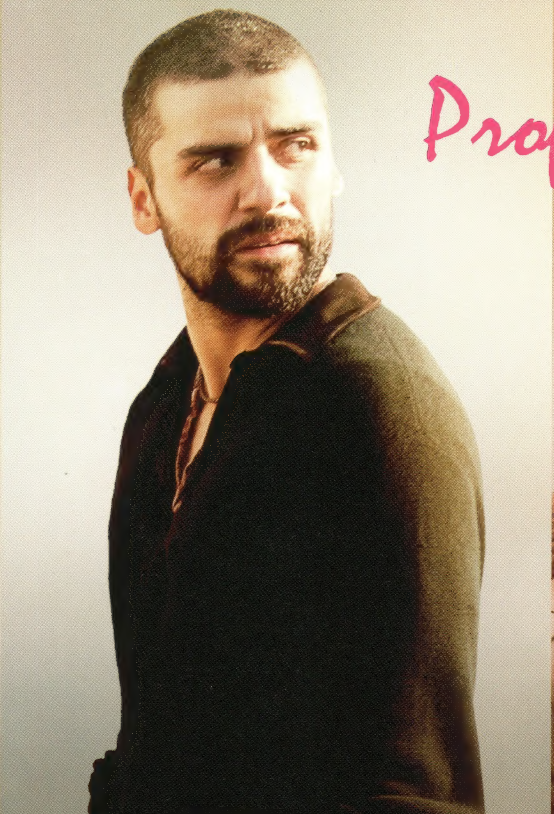
Profile:Cast



・ローズ
クス

ち、62年よりスポーツライター
に出演。これが評判を呼び、
ト・ライブ」の脚本・演出を手
クシードライバー』で映画デ
スト・ニュース』ではアカデミー
れた。俳優業以外にも、メリ
の死後にご用心!』(91／未)、
リウッド・ミューズ』(99)などで

ベート・ベンジャミン』(80)、『ト
験』(83)、『アウト・オブ・サイト』
／声の出演)、『ファインディン
『セイブ・ザ・ワールド』(03)、
／声の出演)など。



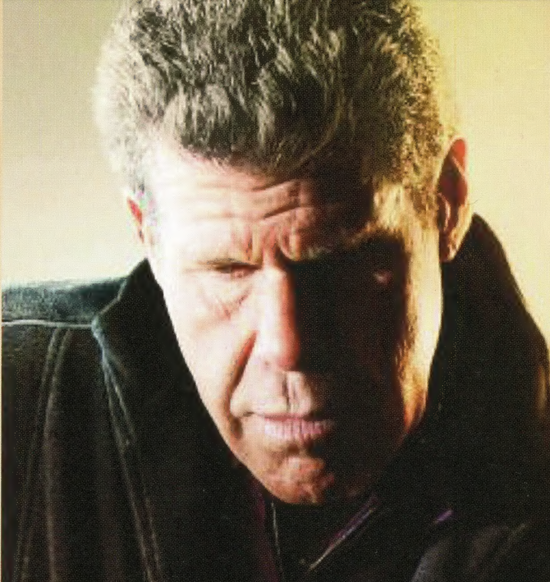
Oscar Isaac | スタンダード
オスカー・アイザック

1980年グアテマラ共和国生まれ。
名門ジュリアード学院を卒業後、2002年に俳優デビュー。TVシリーズでキャリアを積み、『マリア』(06)のヨセフ役で注目される。その後、『ワールド・オブ・ライズ』(08)、『ダイアナの選択』(08)、『チェ 28歳の革命』(09)、『アレクサンドリア』(09)、『ロビン・フッド』(10)、『エンジェル ウォーズ』(11)などに出演。次回作は、マドンナの監督新作"W.E."。また、コーエン兄弟の新作"Inside Llewyn Davis"では主演に抜擢、キャリー・マリガンと再び共演する。



Christina Hendricks | ブランチ
クリスティナ・ヘンドリックス

1975年テネシー生まれ。
高校時代から演劇をはじめ、2007年にスタートしたエミー賞受賞の大ヒットTVドラマ「マッドメン」で一躍脚光を浴びる。その後、「ER 緊急救命室」(01〜／第8シーズン)、「ファイヤーフライ 宇宙大戦争」(02)、「トゥルー・コーリング」(03〜)、「WITHOUT A TRACE／FBI失踪者を追え」(05〜)、「Life 真実へのパズル」(07〜)などのTVシリーズに多数出演。映画出演作は、『レオニー』(10)、『かぞくはじめました』(10／未)など。最近では、Esquire Magazine誌による"世界でもっともセクシーな女性"にも選ばれている。



Ron Perlman | ニーノ
ロン・パールマン

1950年ニューヨーク生まれ。
大学で演劇の修士号を修め、81年にジャン＝ジャック・アノー監督作『人類創世』の原始人役で映画デビュー。86年には同監督の『薔薇の名前』に出演し、その怪演に注目が集まる。87年にスタートしたTVシリーズ「美女と野獣」ではリンダ・ハミルトンと共演し、ゴールデングローブ賞の主演男優賞を受賞。その後も190センチの長身と個性的な風貌を活かし、ギレルモ・デル・トロ監督作『クロノス』(92)、『ブレイド2』(02)、ジャン＝ピエール・ジュネ監督作『ロスト・チルドレン』(95)、『エイリアン4』(97)をはじめ多くの出演作で強烈な印象を残す。2004年には、デル・トロ監督の強いプッシュにより『ヘルボーイ』でタイトルロールに大抜擢、続編も決まるなどキャリアの節目となる代表作となった。
その他の出演作に、『ダウン』(01)、『ネメシス／S.T.X』(02)、『アフロサムライ』(06／声の出演)、『ヘルボーイ／ゴールデン・アーミー』(08)、『塔の上のラプンツェル』(10)、『デビルクエスト』(11)など。

Profile:Crew



Nicolas Winding Refn | 監督
ニコラス・ウィンディング・レフン

1970年デンマーク生まれ。
8歳から17歳までニューヨークに在住。93年に再びアメリカに渡り、アメリカン・アカデミー・オブ・ドラマティック・アーツで学ぶ。デビュー作は、若干24歳で監督を務めた『プッシャー』(96／脚本・出演兼)。本作はカルト的な人気を集め、続く“Bleeder”(99／脚本・製作兼)はベネチア国際映画祭でプレミア上映された。3作目となる“Fear X”(03／脚本兼)では、初めての英語作品に挑戦。ジョン・タトゥーロを主演に迎え、『ブルックリン最終出口』『レクイエム・フォー・ドリーム』の原作者ヒューバート・セルビーJrと共同執筆した本作は、サンダンス映画祭でプレミア上映され大きな話題に。
その後、母国デンマークに戻り、デビュー作の人気に応える形で“Pusher II”(04)、“Pusher3”(06)を監督・製作。シリーズは「プッシャー3部作」として、2005年のトロント映画祭でも上映され世界各国で評判となった。
06年、俳優チャールズ・ブロンソンの分身と主張する英国の有名な犯罪者の伝記映画“Bronson”を監督・脚本。各国のメディアから「次世代ヨーロッパにおける偉大な映像作家」という評価を受ける。その後、ベネチア映画祭でプレミア上映された“Valhalla Rising”(09)の脚本、監督、製作を担当。
現在は、ライアン・ゴズリングと再びタッグを組む“Only God Forgives”、そしてキャリー・マリガンが主演の“I Walk With The Dead”が待機中。またライアンとは、76年の傑作SF『2300年未来への旅』リメイク版の共同脚本にも着手している。
本作『ドライヴ』は2011年のカンヌ国際映画祭のコンペティション部門で上映され、見事監督賞を受賞した。

Hossein Amini | 脚本
ホセイン・アミニ

1966年イラン生まれ。イギリスの作家トーマス・ハーディの小説「日陰者ジュード」を脚色した『日蔭のふたり』(96／マイケル・ウィンター・ボトム監督)で映画脚本家デビュー。本作は、サテライト・アワードの脚色賞にノミネートされ、一躍注目を集める。97年には、文豪ヘンリー・ジェイムズの同名小説を脚色した『鳩の翼』が高く評価され、アカデミー賞、英国アカデミー賞、全米脚本家組合賞、サテライト・アワードの脚色賞にノミネートされた。
その他の代表作に、『サハラに舞う羽根』(02)、『キルショット』(08／未)、『シャンハイ』(10)など。
最新作は、キアヌ・リーブス主演、柴咲コウや菊地凛子など日本人俳優も多数出演する『47RONIN』(12)。

James Sallis | 原作
ジェイムズ・サリス

詩人、小説家、エッセイスト、音楽学者、翻訳家、脚本家などさまざまな顔を持ち、長編はこれまでにニューオリンズの黒人探偵ルー・グリフィンを主人公としたシリーズ「黒いスズメバチ」「コオロギの眼」、そして本作の原作「ドライヴ」が翻訳出版されている。

Newton Thomas Sigel, A.S.C. | 撮影監督
ニュートン・トーマス・サイジェル

1955年生まれ。ニューヨークのホイットニー・ミュージアム・オブ・アメリカン・アートで画家、映像作家としてキャリアをスタート。当時の作品には、85年のアカデミー賞ドキュメンタリー短編賞受賞の“Witness to War: Dr. Charlie Clements”やヒット作“When The Mountains Tremble”などがある。
『カッコーの巣の上で』『天国の日々』などで知られる名カメラマン、ハスケル・ウェクスラーに才能を見いだされ、サイジェル自身の戦争体験を元にしたハスケル監督作『ラティノ』(85／未)で撮影の道へ。その後『プラトーン』(86)、『ウォール街』(87)のセカンド・ユニットでキャリアを積み撮影監督に。2000年にアメリカ撮影監督協会(ASC)に加入。
その他の代表作に、『悪魔を憐れむ歌』(97)、『スリー・キングス』(99)、『コンフェッション』(02)、『ブラザーズ・グリム』(05)、『かけひきは、恋のはじまり』(08)、ロバート・レッドフォード監督作“The Conspirator”(10)など。
また、『ユージュアル・サスペクツ』(95)で一緒に仕事をしたブライアン・シンガー監督とは、『X-メン』(00)、『X-MEN2』(03)、『スーパーマン リターンズ』(06)から『ワルキューレ』まで6本の作品で仕事をしている。

Darrin Prescott | スタント・コーディネーター
ダリン・プレスコット

約20年にわたり、スタントチームの監督としてハリウッドで活躍。彼とそのチームが手がけた「ボーン」シリーズでは、『ボーン・アルティメイタム』(07)で映画俳優組合から表彰された。
その他の代表作に、『インディ・ジョーンズ／クリスタル・スカルの王国』(08)、『ハングオーバー! 消えた花ムコと史上最悪の二日酔い』(09)、『パブリック・エネミーズ』(09)、『GAMER』(09)、『ファースター 怒りの銃弾』(10)など。最近では、『マネーボール』(11)、『宇宙人ポール』(11)のスタントも監督。
また『マトリックス リローデッド』(03)、『マトリックス レボリューションズ』(03)、『Mr.&Mrs.スミス』(05)では、自らスタントマンとして参加もしている。

Marc Platt | 製作
マーク・プラット

舞台、映画、TV界すべてで成功を収めた世界でも数少ないプロデューサーの一人。
「この10年を代表するミュージカル」と評されたブロードウェイの大ヒット作“Wicked”をはじめ、参加したプロジェクトは7度のアカデミー賞、16回のトニー賞、12回のゴールデングローブ賞、19回のエミー賞にノミネートされるという快挙を成し遂げている。
主な映画製作に、『キューティ・ブロンド』(01)、その続編『キューティ・ブロンド／ハッピーMAX』(03)、『ウォンテッド』(08)、『レイチェルの結婚』(08)、『NINE』(09)、『スコット・ピルグリム VS. 邪悪な元カレ軍団』(10)など多数。

Critique

前人未到の100分間のドライヴ

町山智浩(映画評論家)

君を連れて夜通しドライヴしたい
君に君が聞きたくないことを話したい
君の中に何かがある
説明しにくいことが

ユーロなエレクトロ・ビートと加工されたボーカル。ロサンジェルスの夜に筆記体で書かれるタイトル。Drive その色はネオン・ピンク。

このセンスはどこかで観た記憶がある。『卒業白書』(83)だ。トム・クルーズ主演のダークでエロティックな青春映画で、ドイツのプログレ・グループ、タンジェリン・ドリームのシンセサイザーと、シカゴの夜景で始まる。クレジットタイトルの色は紫だが、ポスターのロゴはネオン・ピンクで、しかもDriveと同じ筆記体だった。

「80年代、俺はハリウッド映画のプロデューサーだった」

『ドライヴ』のヤクザ、アルバート・ブルックスは言う。「セクシーなアクション映画だ。批評家にヨーロッパ的だと言われたよ」

このセリフは、80年代の『スカーフェイス』『ザ・クラッカー』、それにテレビの『マイアミ・バイス』などの、ピンクのネオンとデジタルビートの犯罪モノ、いわゆる「ネオン・ノワール」を指している。つまり、『ドライヴ』という映画のスタイルの源流を告白しているのだ。



ジェイムズ・サリスの小説『ドライヴ』は、ウォルター・ヒル監督作『ザ・ドライバー』(78)に大きな影響を受けている。どちらも主人公は逃走車運転手で、名前は最後まで明かされない。ウォルター・ヒルは、セルジオ・レオーネ監督のマカロニ・ウェスタンでクリント・イーストウッドが演じる「名前のない男」の引用だと語っており、ドライバー役のライアン・オニールに西部劇のガンマンが使うコルトSAAを持たせている。

『ドライヴ』が最初の予定通り、ヒュー・ジャックマン主演、ニール・マーシャル監督で映画されていたら、きっと『ザ・ドライバー』へのストレートなオマージュに満ちた、しかし凡庸な映画になっていただろう。マーシャルは『マッドマックス』シリーズへのオマージュだけの映画『ドゥームズデイ』を作ったような映画オタクだから。ところが、この企画を引き継いだニコラス・ウィンディング・レフンは、肝心のカーチェイスすらほとんど見せず、観客から「期待してたのと違う!」と訴えられたほどの奇妙な映画にしてしまった。

『ドライヴ』は、セリフが数えるほどしかない『ザ・ドライバー』よりもさらにセリフが少ない。キャリー・マリガン曰く「私とライアン・ゴズリングが黙って見つめあってるシーンばっかり」なのだ。その代わり、セリフ以外のものが語る。

まず色。ドライバー(ゴズリング)の青い眼、青い服、整備工場の青い壁……。アイリーン(マリガン)の赤いベスト、セーター、アパートの赤い廊下……。画面はいつも、冷たい青や緑と、暖かい赤や黄色やオレンジで塗りつぶされる。その二色のコントラストは、ドライバーの冷たい暴力と、アイリーンの暖かい日常の対立でもある。

出会ってはいけないその二つが交差する。ドライバーの職業を聞いたアイリーンが「危険?」と尋ねる。それは二人の関係をも意味している。

ドライバーがアイリーンの息子とテレビを見ている。「どっちが悪役か、わかる?」「サメだから」サメSharkには「借金取りのヤクザ」という意味もある。後でアイリーンの父親は息子の眼の前で借金取りに半殺しにされる。

アイリーンの夫の出所祝いパーティで流れる歌「アンダー・ユア・スペル」の歌詞は、彼女のドライバーへの思いを代弁する。

食べられない　眠れない
あなたのことしか考えられない

レフンが引用する映画は普通じゃない。たとえば、ドライバーが背負うサソリ。それは、ケネス・アンガーの『スコピオ・ライジング』(63)で繰り返されるサソリのイメージを思い出させる。これはハーレー・ダヴィッドソンに乗るバイカーを描いたアート映画の古典で、既成のポップ・ソングに主人公の気持ちを語らせるテクニックの先駆と言われる。また、ドライバーが語るサソリとカエルの話は、『アーカディン/秘密調査報告書』(55)で、監督でもあるオーソン・ウェルズが披露する話である。

ストリップ・バーの控室でドライバーが敵を拷問している最中、周りのストリッパーたちはまったくの無表情で動きもしない。これはデヴィッド・リンチの『ブルーベルベット』(86)で暴れるデニス・ホッパーと無表情なダンサーたちのシーンの引用だろうか。

美しくも惨たらしいエレベーターでのキス(ライティングの絶妙な動きに注目してほしい)。エレベーターのドアが閉まった時から、ドライバーは人間ですらなくなっていく。レフン監督はアレハンドロ・ホドロフスキー監督の『エル・トポ』(70)に影響を受けたという。『エル・トポ』は「名前のない男」のキリスト的イメージをさらに推し進め、西部のガンマンが「死」を経験して救世主として復活する。

最後に流れる歌は「リアル・ヒーロー」。

あなたは証明して見せた
普通の人間であること
本当の英雄であること

様々な影響を受けながらも『ドライヴ』は結局、どんな映画にも似ていない。誰も見たこともないものを見せてくれる、100分間のドライヴなのだ。

Critique

工芸品に生ける毒花のごとき“死”、その方法論

―監督ニコラス・ウィンディング・レフンの演出スタイル―

尾﨑一男（映画評論家＆ライター）

「暴力は“死”への冷酷な過程にすぎない。そこに計算された“美”が介入してはならないのだ」

これは大阪を舞台にした刑事アクション映画『ブラック・レイン』(89)の製作時、監督のリドリー・スコットが日本のマスコミに発したコメントである。光と影が織りなす映像美を意匠としてきた男が、いったい何をか言わんや……まぁ正直そう思わなくはないが、監督の言葉にウソはない。こだわりのビジュアリストとして定評のある氏だが、どの作品も登場人物が加害的に迎える“死の瞬間”は、暴力描写や流血の生々しさにおいて即物的で、過剰に装飾されることはない。むしろ巧みにデザインされた映像美の中にそれらが置かれることで、死そのものが持つ無秩序さや残酷さといった要素を大きく際立たせるのだ。

主人公のドライバー（ライアン・ゴズリング）がヴァイオレンスの深淵へと墜落していく、破滅型サスペンス映画『ドライヴ』。その監督であるニコラス・ウィンディング・レフンもまた、先に挙げたリドリー・スコット同様、作中で暴力や死を際立たせる描き手である。今やカメラが激しく動く、写実的な映像スタイルが主流のハリウッドにおいて、固定された視点でじっくり被写体を捉える本作のカメラワークは主流に背を向けるがゆえに個性的だ。ワイドスクリーンを活かした人物の機能的な配置や、ショットからショットへの移行はどのポイントも流麗でムダがなく、画面作りに細心の設計が施されてるようにうかがえる。そうした完璧さと、その中に置かれた醜悪な暴力・死の描写といった要素が際立つ“コントラストの妙”は、先のスコット監督のケースと限りなく似ている。

美しい工芸品に、まるで毒花を生けるかのような『ドライヴ』のスタイル。おそらくレフンは相当なコントロール・フリークなのだろう。自身の演出プランを映像に置換させるためならば、絵コンテから照明、撮影、演出とあらゆるものを徹底させる性質に違いない。

そして、そのアプローチは恐らく監督キャリアの早期から実践されているのだ――と、こう考えながら改めて処女作にあたってみると、意外や『ドライヴ』とは異なるレフンの映像スタイルに面食らうことになる。

彼の初監督作品であり、後にシリーズ化される『プッシャー』(96)は、映像が終始ハンドヘルト（手持ち）のカメラワークで視覚統一されている。小刻みな編集をせず、現場で撮った素材をそのままラフに繋げたかのような、いわばドキュメンタリータッチの演出だ。これは先に挙げた、ハリウッドの当世的撮影スタイルそのものといっていい。だが、こうした手法は手法で、警察と闇組織の両方から追われるプッシャー（麻薬密売人）の、緊張的立場を描く表現としてすさまじい説得力を放っている。

レフンの作品に『ドライヴ』のような映像スタイルの確立を見るのは、彼の名前が欧米で注目されはじめた“BRONSON”(06)からだろう。イギリスの実在した極悪囚人をモデルに、主人公ブロンソンの独房生活と犯罪人生を描いた本作。断片的には『プッシャー』シリーズと類似したイメージが見られるが、カメラワークは固定が基調となり、構図はどのショットにおいても洗練され、映像フォーマット自体の荒削りな感じは払拭されている。だが本作も『プッシャー』同様、そうしたスタイルが破壊的人物であるブロンソンを捉えるにクールであり、むしろ彼のパンチが効いた「規格外」のワイルドさが引き立つのである。

レフンはブレのない完全スタイル主義者……かと思いきや、フィルモグラフィを紐解くほどに、題材に応じてスタイルを多様に展開する「フレキシブルな職人」の一面が顔をのぞかせてくる。もしかすると『ドライヴ』も、作品が成立するその背後では、観る者の推察に寄らぬ意外なアプローチが執られたのではないだろうか？

筆者は、本作のプロモーションで来日したレフン監督に話を聞く機会に恵まれた。そこで先述した疑問に回答を求めると、彼はこう語ってくれたのである。

「僕は撮影時に細かな画コンテを用意したり、事前の打ち合わせはあまりしないんだ。ロケ現場を決めてそこに俳優を連れ、その中で俳優の動きを見て、彼らが居心地のいいショットを優先的に撮影していく。構図やショットの流れはその場のセンシビリティ（感性）で考えるといっていい」

どうやら、こちらの考えは裏付けられた形となったようだ。事前の緻密な計算によって生み出されたとしか思えぬ『ドライヴ』の映像が、撮影現場での即興性に準じた演出によるものだとは、ただただ素直に驚かされる。

「もし、撮影時に用意された絵コンテや設計図があったら、自分の作業は単にそれらを映像でなぞるだけのものになってしまう。僕はイメージを自在に膨らませていく“映画監督”の役割を存分に楽しみたい。だから『ドライヴ』は原作をいかに映画に置き換えるかという考えではなく、本作の象徴であるストイックなドライバーのイメージをまずは手がかりに、それをどう映画として膨らませていくかという作り方をしていったよ」

こうした彼の指向は、具体例として表立って挙げられている。例えばアメリカ映画撮影協会の機関誌『アメリカン・シネマトグラファー』の『ドライヴ』特集号(2011年10月号)によれば、レフンは同作の撮影監督ニュートン・トマス・サイジェルに『スコピオ・ライジング』(63)を提示し、『ドライヴ』の映像的外観作りを希求したという。『スコピオ～』はアヴァンギャルド（前衛）映画の巨匠ケネス・アンガーの代表的な古典的名作で、「レザージャケットに身を包んだバイカー」というキービジュアルが作品の象徴として妖しく鮮烈な存在感を放つ。そのバイカーのイメージを、レフンは見事なまでにゴズリングが扮したドライバーのキャラクターへと昇華させているのである。

こうした話ひとつをとっても、『ドライヴ』が小説を映画化するという単純な流れ作業から生まれたものではなく、断片的なイメージを拡大化していくことへの、監督のフェティッシュなまでのこだわりを如実に知ることができるのだ。そのあたりはレフンもこう同意してくれている。

「そう、僕の創造の発露は“どうやったら観客が興奮する絵を撮れるのか？”に尽きるし、そのためにはアドリブだからと言って場当たり的に撮影するのではなく、官能的なまでに表現を追求しているんだ。だから僕を呼称するのならば、“フェティッシュ・フィルムメイカー”と名付けてほしいね(笑)」

『ドライヴ』の映像の完成度と、劇中における死や暴力描写の扱いから、筆者はためらうことなくリドリー・スコットを引き合いに出した。だが、レフンの驚異ともいうべき演出論が明らかとなるにつれ、ここでもうひとりの天才監督＝［スティーブン・スピルバーグ］の名を挙げずにおれない。

今や巨匠の風格をもって映画界に君臨する“帝王”スピルバーグ。彼もまたアドリブ的なディレクションを得意とし、事前の設計に画面作りを委ねず、自らの演出力をパッショナブルに展開させる作家である。例えば第二次世界大戦映画の革命的作品『プライベート・ライアン』(98)。映像的リアリティの極地として、後の戦争映画のスタイルを変えたスピルバーグの代表作だが、同作における冒頭のノルマンディ上陸戦のシーンは絵コンテなどを用いず、そのほとんどを現場でのアドリブ演出体制で撮られている。その神ワザのようなアプローチは、いやおうなく『ドライヴ』のレフンと重ねることができるのではないだろうか。

そして、そんなスピルバーグが映画監督としてどれほどの成功を収めたかという成果も、レフンにそのまま重ねたい。非凡なセンスを持つ彼がこれから見せるであろう、未来の活躍への期待も込めて――。



Critique

しなやかな才能でアメリカ映画を熱くする、唯一無比の魅力

佐藤久理子(映画ジャーナリスト)

“ドライバー”の仕事の掟はシンプルだ。武器は持たない、強盗はしない、ただクライアントを車で運ぶだけ。仕事が済んだら、まるで存在すらしていなかったかのように姿を消す。派手なカーチェイスで幕を開ける映画の冒頭、この寡黙な一匹狼のドライバーが顔色ひとつ変えずに任務を果たす様子を見れば、きっと誰もが即座に引き込まれるに違いない。夜のネオンに照らし出される、その冷ややかな碧眼に浮かぶ孤独の色が一層、彼をミステリアスで魅力的に仕立てている。

こんな影のあるヒーローを一部の隙もなく演じきっているのが、いまこの上なく刺激的な俳優であるライアン・ゴズリングだ。甘いマスクの二枚目にしてどことなくストイックな雰囲気をたたえ、ときに凶暴な芳香を発したかと思えば、そのじつロマンティックであったりもする。これほど多面的で抗し難い魅力に満ちた若手俳優は、ハリウッド広しといえどもそうはいないだろう。だがこうした持ち味は従来の彼の魅力というよりは、むしろチャレンジングな役柄を選びながら、そのキャリアの過程で彼が積極的に開拓してきたものでもある。

カナダのオンタリオ州出身の彼は、ブリトニー・スピアーズやジャスティン・ティンバーレイクと共に、アメリカのディズニー番組で子役としてデビュー。そのまま行けば、このルックスで第二のトム・クルーズにもなり得たかもしれないが、二十代に差し掛かる頃から少しずつその方向性が変わって行く。あるいは、14歳でデヴィッド・リンチの『ブルーベルベット』に惚れたというぐらいだから、もともと持っていたテイストが徐々に露になったといった方が相応しいかもしれない。ネオナチ(『The Believer』)、ドラッグ中毒(『Half Nelson』)、ダッチワイフに恋する男(『ラースと、その彼女』)など、あえて困難な役柄を選び、さまざまな映画賞に絡むようになる。さらに資金集めの段階から5年も関わったインディペンデント・ムービー、『ブルーバレンタイン』では、破綻した結婚生活に傷ついたアル中の男を演じるために、髪の毛を抜き体重を増やして自らそのルックスを壊してみせた。一方、日本では『ドライヴ』と同時公開となったジョージ・クルーニーの監督作『スーパー・チューズデー〜正義を売った日〜』で、政治的理想と現実のギャップに悩む青年に扮したかと思えば、スティーブ・カレルと共演したコメディ『ラブ・アゲイン』で百八十度方向転換をして、絵に書いたようなナンパな色男に扮し、二枚目のイメージを笑い飛ばしている(その完璧までに鍛え抜かれたヌードを目にした相手役のエマ・ストーンが息を飲むシーンは忘れ難い)。こうして着実に芸域を広げると共に、そのしなやかな柔軟性で役者として希有な存在感を培って来たのである。

「いつかスーパーヒーローを演じたいと思っていた。それもモンスターと戦うCGIずくめのものではなく、もっと生身のヒーローに憧れていたんだ」

こう語るゴズリングにとって、『ドライヴ』はまたとない素材だった。原作の映画化権を獲得したプロデューサーから話を持ちかけられた彼は、「監督を自由に選んでいい」という条件のもと、デンマーク出身で次世代のラース・フォン・トリアーと言われていたニコラス・ウィンディング・レフンに白羽の矢を立てる。このセンスもまた心憎い。



「ニコラスの映画には暴力的な中にブラックなユーモアがあって、その不思議なブレンドに惹かれたんだ。僕はずっとアメリカのロマンティックなティーン・ムービーにヴァイオレンスや激しさを足したような映画がやりたくて、『ドライヴ』こそそれにぴったりの素材だと思った。これはたんに車のカーチェイスが盛り込まれたアクション映画ではなく、非現実的でファンタジー的な要素のある作品だ」

そしてまた、映画史に残るような“もの言わぬ”ヒーローの映画でもある。実際本作のゴズリングは、クリント・イーストウッド的なカリスマ性とスティーブ・マックイーン的なクールさ、さらにはロバート・レッドフォード的な甘さを兼ね備えた、唯一無比の魅力を放っている。米タイム誌が選ぶ「2011年のもっともクールな人」や、ピープル誌の「もっともセクシーな男トップ10」などに選ばれたのも納得だろう。

もちろん、今後も彼のスケジュールはびっしりと埋まっている。40、50年代を舞台にギャングと闘う警官に扮した『ギャングスター・スクワッド』、テレンス・マリックの期待作『Lawless』、『ブルーバレンタイン』のデレク・シアンフランス監督と再び組む新作、さらにレフン監督とはよほどウマがあったのか二作も企画があるという(一作は撮影済み)。

「インディもメジャー作品も両方やっていきたい。結局は自分の嗅覚に引っかかる、やりたいと思えるものをやっていくのがベストだと思うから」と語るゴズリングは、いまアメリカ映画をもっとも熱くする俳優のひとりであることに間違いない。


662
85





D PRICE TIRES

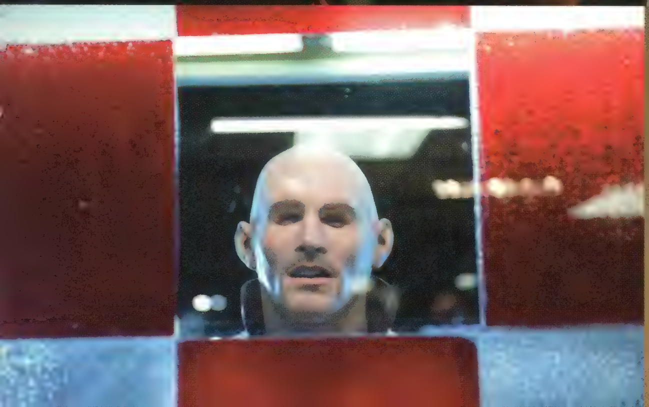












Production Note

レフン監督×ライアン・ゴズリングの出逢い

若干24歳で監督デビューを飾った『プッシャー』(96)が評判を得、今や"ラース・フォン・トリアー以来、最大の成功を収めた映画監督"の異名をもつデンマーク出身のニコラス・ウィンディング・レフン。欧米諸国ではかねてから絶大な人気を得ていたこの鬼才に眼を付けたのが、本作の主演ライアン・ゴズリングだった。

レフン監督は、当時ハリソン・フォード主演、ポール・シュレイダー脚本の新作に取りかかろうとしていた。だが、主人公が死ぬ設定にフォードが異を唱えはじめ、そのことに納得できなかったレフンは監督を降板。まさにハリウッドの洗礼を受けていた頃、ゴズリングから「一緒に映画を作らないか？」という1本の電話を受けた。それからとんとん拍子に話が進み、『ドライヴ』は通常のハリウッド映画と異なり、企画からすぐに撮影段階へと突入していく。

レフン監督は語る。「ライアンは、カリスマ性があって、主役に相応しいルックスも持ち、訓練された名優のような魅力もある。ドライバー役には、爆発的な暴力性と、一匹狼として孤独に生きながら、人を愛することで変わっていくリアリティさを出せる役者が必要だった。こうした演技の幅を持っている役者は、実はほとんどいない。彼は僕のヒーローだよ。俳優としても、また1人の人間としてもね！　映画作りを通じて、僕らの絆はかなり強いものになったんだ。まるで『殺しの分け前／ポイント・ブランク』のジョン・ブアマン監督と主演のリー・マーヴィン、または『ブリット』のピーター・イエーツ監督とスティーヴ・マックィーンみたいにね。監督には主人公が必要だ。逆も然り。この2つの翼がしっかり機能すれば、その他のことは二の次なのさ。」

名前のない男"ドライバー"

レフン監督は、小説の舞台であるLAの雰囲気とスタントドライバーの物語が映画的であり、何より原作の簡潔で無駄のないナレーション、皮肉なユーモアで味付けされたノワール調のスタイルが気に入った。

「主人公のドライバーは、僕が"Bronson"や"Valhalla Rising"で作り上げたキャラクターにも繋がる役柄だ。伝説的で、何となく神に近い人間。僕はヒロイズムの闇の部分にすごく興味があるんだ。正義を守ろうとすることや止まることを知らない衝動が、何者かによって遮られてしまうというのがとても好きなんだ。」

子役としての実績、そして『きみに読む物語』以降の目覚ましい活躍で、ライアン・ゴズリングは着実に役者としての地位を確立してきたが、彼自身は昔から典型的な商業映画を避け、あえて困難な役にチャレンジし続けてきた。

ゴズリングは語る。「ドライバーという役にすごく興味をそそられたんだ。複雑でドラマティックな2面性の演じ分けが要求されるからね。一方で彼は、孤独で寡黙な人物。動きも、話し方も一切無駄が無い。つねにカードを身体の近くに持っていて、リアクションすらポーカーフェイスで何を考えているのか分からない。それは、車の運転という流





動的な状況で彼が身に付けた機械的な自己抑制なんだ。もう一方で、彼は精神を病んだ人間だ。『タクシードライバー』のトラヴィスのようにね。薄気味悪い冷静さの下に、怒りのエネルギーや一触即発の暴力性が溜まっている。穏やかで安全なドライブを楽しんでいる時に、他の車が進路を横切るような感じだ。バーン!と、溜まっていたエネルギーが一挙に暴力として放たれるんだ。それがドライバーの基本的な性格だ。淀みないドライビングテクニックで傷ひとつ付けることなく障害物をかわすのに、突発的な事態が起こると、それこそ甚大な被害が発生してダメージを受けることになる。苦労したのは、ストップウォッチが正確に時を刻むように、ドライバーがエネルギーをしっかりと抑え込んでいるという雰囲気を観客に感じとってもらうことだった。」

レフン監督は語る。「『ドライヴ』は半分が人間、そしてもう半分が機械の男の物語だ。彼には日の出と日没があるだけ。夜になると昼間と違う服に身を包み、精神的にも別の場所にいる。彼の昼と夜の世界は、決して相容れることはないんだ。」

キャリー・マリガンの登場

ドライバーが恋に落ちるアイリーン役には、以前からレフン監督作品のファンで一緒の仕事を切望していたキャリー・マリガンがキャスティングされた。だが、『ドライヴ』の指揮者が誰かを知ったのは、彼女が脚本を読んで興味をもった後のことだった。マリガンの熱意に、レフン監督は彼女にあわせてアイリーンの設定を多少変更させた。

マリガンは、この役に興味を持った理由を次のように語る。「アイリーンというキャラクターは実は難しい役。映画の二次的なプロットの中心人物だから。それは文字通り、彼女とドライバー、彼女の夫スタンダードとの間の三角関係で、結局のところ、それが最も重要な関係でもあると思うの。ドライバーは、彼女にとっては白馬の王子様。でも、スタンダードも過ちを犯したとはいえ、今は本気で更生しようとしてるし、何より17歳の頃から愛し続けてるんだもの。彼女にとっては簡単に決断できることではないの。この2つの衝動的な感情を演じ分けることは、特にスタンダードとドライバーが手を組むシーン以降はとても苦労したわ。」

レフンは言う。「アイリーンは、ジェイムズ・サリスの原作ではラテン系の設定だったから、最初はラテン系の女優を探していたんだ。でもなかなか決断出来ないでいた時に、キャリーのエージェントから電話があって彼女が僕を訪ねてきた。彼女がドアを開けて部屋に入ってきた瞬間に、キャリーこそがアイリーンだって確信したよ。キャリーのイノセントな雰囲気は、僕の妻にも少し似ていたしね(笑)。あと、僕は10代の頃、『すてきな片想い』という映画が大好きだったんだ!ずっとあの映画をリメイクしたいと思っていた。それを『ドライヴ』で、思いもよらない形で実現することができた。キャリーには、あの頃のモリー・リングウォルドみたいな知性と魅力が溢れてる。ライアンとのロマンティックな場面は、暴力的な他のシーンと比べて、とても繊細で綺麗なコントラストになってると思うよ。」

3人の個性派名脇役

ドライバーのエージェント兼マネージャー、そして父親のような存在でもあるシャノン役には、3年連続エミー賞受賞のブライアン・クランストンがキャスティングされた。
クランストンは語る。「『ドライヴ』は古典的なフィルム・ノワールの香りを残しているけど、私がそれの好きなところは、脇役が映画を観終わった後でも忘れられないほど活き活きしているとこなんだ。必ずしもヒーローではなく、同情を呼ぶようなキャラクターでもない、言ってみれば取るに足りない脇役が、命を吹き込まれた個性溢れるものになっているというね。シャノンも大きな夢を持っているけど、大体が満足いかない残念な結果に終わってしまう、そんなキャラクターだ。彼が悲観、絶望していることは明らかで、幸せそうな場面であってもそれが伝わってくるんだ。こういう役柄を演じるのは大好きさ。」

ガラガラ声のブルックリン訛りと、一度見たら忘れることのできない面構えのロン・パールマンは、血の気の多い街のギャング、ニーノを楽しみながら演じた。「この役を演じるのが楽しくなかった、なんて振りをするつもりは一切ないよ（笑）。すべてのシーンで卑語をギターのソロみたいにまくし立てながら、周りの雰囲気も自分色に染めてしまうんだ！監督はアドリブの余地を与えてくれたし、彼自身も楽しんで受け入れてくれた。そのシーンがどういう場面か正確に理解していたし、どうやって表現すべきかも知っていた。だから計算されたアドリブが許されたんだ。役者としてはすごくやりやすかった。」

ロン演じるニーノと対をなす、一見フレンドリーに見える地味な犯罪者バーニー・ローズを演じたのはアルバート・ブルックス。無害な見た目の裏に、冷酷な無慈悲さを隠し持つ人物だ。
「ロンとの競演はとても楽しかったよ。我々の演技に対する考え方は、キャラクター同様、全く違うからね。これまで神経質で意気地のない、いわゆるザコのキャラクターをたくさん演じてきた。犯罪組織の幹部役に私をキャスティングするなんて、最初は冗談かと思うだろ？バーニーはニーノの相棒で、彼より頭がよくて、人当たりもよい、弱そうな人物。でも彼は、正体を隠して相手に近づくんだ。本当の恐ろしさは、懐に入って握手をしようとする瞬間まで分からない。それを明確なアクションで見せるんじゃなく、潜在的な威圧感を感じさせる演技をする、その難しさが魅力的に感じたんだ。」
ブルックスは続ける。「バーニーの慎重なまでに隠された暴力性は、ドライバーと似ている点でもある。2人には類似点があるから面白いんだ。良く出来た犯罪映画には、主人公と悪役の間に意味深な関係性があることを、レフン監督は直感で知っている。この2つは、大きく違うようで実は似ている。それは、深いテーマに至る手段にもなるし、何よりドラマ性を高めてくれるんだ。」
レフン監督はブルックスについてこう話す。「彼には一度も会ったことがなかったし、碌に彼のことも知らなかったのに、この役をアルバート・ブルックスに演じて欲しいとずっと思ってたんだ。彼は今まで人を殺すどころか、悪役すら演じたことがなかった。だからこそ、適役だと思ったんだ。実際に会ってみたら、まるで火山が爆発するような怒りを表現できて、それをどのタイミングで発揮するのか、逆に僕がしっかりと教えてもらう結果になったよ。」







鮮烈な映像と音楽、そしてバイオレンス

『ドライヴ』のまるでスクリーンに引き込まれるような計算されつくした映像と音楽。それがもっとも顕著なのが、カーチェイスのシーンだ。
レフン監督は語る。「実は僕は車を持っていない。運転免許すらね。でも、車に対してはフェティシズムを感じる。特定のブランドやメーカーを好きっていうわけじゃなく、エンジン音やスピードを感じることに興奮するんだ。3つのカーチェイスの場面は、全く異なるアイディアに基づいて音楽を付けていったんだ。1つ目は、“チェスの対戦”のイメージ。ドライバーが冷静さを維持することを要求されるような知力の勝負で、婉曲的でスローなテクノ調の曲をジョニー・ジュエルに付けてもらった。2つ目は、直球勝負のカーチェイスで、アドレナリン全開のシーン。エンジンの唸る音やブレーキ以外に曲は流れない。比較的静かな時間で引っ張るからこそ、期待が高まるんだ。3つ目は、尾行、そして極秘裏に攻撃を仕掛けるシーンだから、『ヤコペッティの残酷大陸』という70年代前半のサウンドトラックの“Oh My Love”というミステリアスでサスペンス調の曲が流れるんだ。」

『ドライヴ』における暴力シーンは、実はそれほど登場しないにも関わらず、最大限の効果を発揮している。レフンは言う。「暴力は、ショッキングな使い方をすれば、効果を発揮する。現実世界でも、暴力なんてほんの数秒で終わってしまう。最近の映画は、暴力表現がある意味ポルノ風にずるずる続く傾向にあるけど、そうすることで結局は効果を低下させてしまってる。暴力による“恐怖”がつねに存在していると思わせることこそが、緊張感を作り出しているんだ。それがいつ炎となって噴き出すか分からないからね。」
また本作では、間接的な表現を巧みに使っているのも特徴だ。ある場面で、ドライバーが殺し屋の頭を滅多蹴りにして片づけてしまうシーン。「スクリーン上には、ジャケットに付着した数滴の血しか映らないんだ。でも、鋭いパンチ音が、やがて骨が折れたり肉が潰れる音に代わることで、どんな見せ方よりも衝撃的な場面になる。」

プロデューサーの一人、マーク・プラットは語る。「確かに『ドライヴ』には暴力的な瞬間が存在するが、実に上手く処理されていて、詩的ですらある。ともすればありがちな大作映画になってしまう可能性もある中で、レフン監督は題材に真剣に向き合い、ジャンル特有の要素を凝縮するのでなく、要素自体を独自のレベルに引き上げようとする。形式通りのカーチェイスのハンドルを握る代わりに、そのスタイル自体を野心的に作り変えているんだ。『ドライヴ』は、評論家にも、一般の観客にも喜んでもらえる作品だ。本作によって、これまで以上にレフンの知名度が爆発的に広まることは間違いないだろうね。」







第64回カンヌ国際映画祭
監督賞受賞

Cast & Crew

ドライバー：ライアン・ゴズリング
Driver Ryan Gosling

アイリーン：キャリー・マリガン
Irene Carey Mulligan

バーニー・ローズ：アルバート・ブルックス
Bernie Rose Albert Brooks

シャノン：ブライアン・クランストン
Shannon Bryan Cranston

ブランチ：クリスティナ・ヘンドリックス
Blanche Christina Hendricks

ニーノ：ロン・パールマン
Nino Ron Perlman

スタンダード：オスカー・アイザック
Standard Oscar Isaac

監督：ニコラス・ウィンディング・レフン
Directed by Nicolas Winding Refn

原作：ジェイムズ・サリス（ハヤカワ文庫刊）
Based on the book by James Sallis

脚本：ホセイン・アミニ
Screenplay by Hossein Amini

撮影：ニュートン・トーマス・サイジェル,A.S.C.
Director of Photography Newton Thomas Sigel, A.S.C.

編集：マシュー・ニューマン
Edited by Matthew Newman

音楽：クリフ・マルチネス
Music by Cliff Martinez

衣裳デザイン：エリン・ベナッチ
Costume Designer Erin Benach

プロダクションデザイン：ベス・マイクル
Production Designer Beth Mickle

スタント・コーディネーター：ダリン・プレスコット
Stunt Coordinator Darrin Prescott

製作総指揮：デヴィッド・ランカスター、グレイ・ミシェル・ウォルターズ、ビル・リシャック、リンダ・マクドノー、ジェフリー・スコット、ピーター・シュレッセル
Executive Producers David Lancaster, Gary Michael Walters, Bill Lischak, Linda McDonough, Jeffrey Stott, Peter Schlessel

製作：マーク・プラット、アダム・シーゲル、ジジ・プリッカー、ミシェル・リトヴァク、ジョン・パレルモ
Produced by Marc Platt, Adam Siegel, Gigi Pritzker, Michel Litvak, John Palermo

ドライヴ

2011年／アメリカ映画／カラー／シネスコ／ドルビーデジタル／100分／原題：DRIVE／字幕翻訳：岡田壯平 R15+ 映倫

drive-movie.jp

提供：クロックワークス、バップ
配給：クロックワークス
発行日：2012年3月31日
発行元：クロックワークス　〒150-0022 東京都渋谷区恵比寿南2-19-7
定価：700円（税込）